

氏名(本籍)	おおのいずる 大野出(東京都)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第1,314号		
学位授与年月日	平成7年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当		
審査研究科	哲学・思想研究科		
学位論文題目	日本近世における老荘思想の受容 —老荘思想と儒教思想との交渉をめぐって—		
主査	筑波大学教授	奈良博順	
副査	筑波大学教授	広神清	
副査	筑波大学教授	博士(文学) 竹村牧男	
副査	筑波大学教授	犬井善壽	
副査	筑波大学助教授	中村俊也	

論 文 の 要 旨

本論文は、日本近世—徳川幕藩体制時代—における老荘思想の受容について、儒教思想との交渉という視点から考察したもので、「儒老合一論」の展開を中心課題としつつ、「儒荘合一論」の誕生にいたる過程を考察の対象としている。

本論文の構成は次の通りである。

序文

第1章 儒老合一論と『老子膚斎口義』

第2章 仏老批判における林羅山の老子観

第3章 林羅山の老子観

第4章 民衆思想における老荘思想の受容

結論

序文では本論文の意図・視点および方法等について述べている。ついで第1章では従来日本において『老子』は河上公の註釈によって読まれていたのに対し、林羅山は、それまで日本でほとんど知られていなかった林希逸の『老子膚斎口義』を取り上げていることを論じ、羅山が『口義』に着目した理由について考察し、そこに羅山の「儒老合一論」の立場が見られると述べている。すなわち①羅山は新時代の儒学者としての独自性を主張する必要から、伝統的な老子解釈となっていた河上公註を捨て、宋儒である林希逸の解釈を取り上げた。②『口義』は儒家の經典の文言や思想によって『老子』を解釈しており、その結果『老子』が儒家思想に近いものになっている。③そのため『老子』の儒家

思想への鋭い矛先が巧みにかわされており、『口義』を通して理解される『老子』は、当時の社会に受け入れ易くなっている。④『口義』が『老子』から読み取った「無心」の思想に羅山も注目し、また自著『老子抄解』で「無心」の思想を展開しているが、これは彼の『春艦抄』などに述べられている朱子学思想とも整合している。以上の諸点を指摘している。

第2章においては、羅山の老子観に関する考察範囲を広げ、『羅山先生文集』、『羅山先生元集』等々、羅山の言説を集めた資料を年代順に追い、彼の老子観の変遷を明らかにしている。それによると、彼の老子観は慶長元和期と寛政期以降との二期に、すなわち彼の20～30才代とそれ以降とに、大別できるとし、前者を「羅山前期老子観」、後者を「羅山後期老子観」と命名している。本章では主として前期の老子観を述べているが、この時期、羅山は既成の諸思想を儒教と反儒教との二極に分け、前者を肯定、称賛する一方、道教、仏教と共に『老子』を反儒教として否定的にとらえているという。またこの時期の羅山は儒教に対立する思想を「仏老」「釈老」「老仏」の語で表現しているが、ここでいう「老」とは神仙説を含めた広義の道教および『老子』を含めた意味で使用している。だが「羅山後期老子観」の時代になると、反儒教の思想から『老子』が除かれ、広義の道教と仏教とを結合した「仙仏」「仙釈」の語が用いられていると指摘している。さらに彼が39才で書いた『徒然草』の註釈書『野槌』は「仏老」の語をしばしば用いており、前期老子観を代表する仏老批判の書であるとしている。

第3章は、主として「羅山後期老子観」を考察の対象としている。老子観の前期から後期への変遷は、寛永2年(42才)から寛永8年(49才)にかけて徐々に進んだと指摘しているが、この変化に直接影響しているのは、すでに第1章で明らかにされているように、羅山の『老子齋齋口義』との出会いである。この時期はまた彼の徳川幕府内における儒学者としての地位の確立期に当たると同時に、元和偃武期に入り、戦国対立の時代が終り、社会的安定の約束された時代であった。このような羅山の個人的状況と社会的環境の変化を受けて、彼においても対立排他の意識が薄れ、それが老子観にも影響しているのであろう、と解釈している。

この老子観の変遷を顕著に反映しているものとして「孔老問答」に対する羅山の解釈の変化を指摘している。すなわち、孔子が老子に「礼」について教えたかどうかについて、慶安2年(67才)、羅山は、自分より身分の低い者に対して自尊心を捨てて教えることができるものも、孔子が君子たる所以であると説明していることに言及して、この点にも後期老子観が顕著に現れているとしている。

第4章では、江戸中期以後、『老子』に代わって『莊子』が思想界の表舞台に登場するが、その契機になったのが談義本『田舎莊子』の刊行(享保12年)であり、この中で著者佚斎樗山は「莊子は聖門の別派也」という「儒莊合一論」を展開していると指摘している。すなわち樗山によると、『莊子』の主意は万物を生成化育する絶対的存在である「造化」にすべてを委ね、これの定めた「命」に安んずることにある、としているが、その底流には朱子学的な色彩の強い「天の思想」があり、さらにその背景には林希逸の『莊子齋齋口義』の朱子学的解釈が存在していることを明らかにしている。

さらに『田舎莊子』とほぼ同時期に登場する石田梅岩が老莊思想を受容していたことはよく知られているが、梅岩と老莊思想との関係をめぐってしばしば取り上げられる梅岩の「形二由ルノ心」(心

は形に従うもの)について、それと『莊子』との関係が従来論じられてはいるものの、事實はそうではなく、それが『田舎莊子』を典拠としていると指摘し、石門心学と老莊流談義本とが、その後も密接に関係していく点を考察している。

結論においては、以上の論述を要約し、徳川時代初期に儒家思想に対する批判思想としての老莊思想が、林希逸の『老子膚斎口義』、『莊子膚斎口義』というフィルターを通して「儒老合一論」さらには「儒莊合一論」へと展開する過程を明らかにし、徳川時代における思想の構図を著者なりにつくりあげている。

審 査 の 要 旨

徳川幕藩体制の成立と呼応するように、時代思潮の中核が仏教思想から儒家思想へと移行していったことは明らかである。本論文はこの儒家思想と対立的な老莊思想が、当時の社会に浸透して、「儒老合一論」が行なわれ、これに追隨する形で「儒莊合一論」が現れてくるという展開過程を明らかにしている。論旨は明白で一貫しており、かつ実証的で、注目すべき成果をあげている。

徳川時代における老莊思想の展開について、林希逸の『老子膚斎口義』が河上公註に代って広く普及していたことは、すでに先学によって指摘されてきたところであるが、希逸の註釈を日本で最も早く見出した林羅山がこれに着目した理由についての追及は、従来十分とは云えない状態であった。著者は、当時の羅山を取り囲む諸状況についての考察を通して、四点にわたる自論を展開している。

さらに『羅山先生文集』その他羅山の言説を集めた資料を詳細に分析し、羅山の老子観を年代を追って明らかにした結果、前・後期2期に大別できることを論述し、しかもそれが羅山の幕府内での地位の変化に平行していることを明らかにしている。羅山については、従来官学的かつ保守的で、朱子学一辺倒の思想家という見解が定着しているように見えるが、以上のような視点からの考察により、新たな羅山像を提示している。

また、『田舎莊子』における「儒莊合一論」の論拠である造化の思想の底流に朱子学的天の思想が流れていることを指摘している点や、石田梅岩と老莊思想との関係については、先学によってしばしば論じられてきたが、これについても、新たに『田舎莊子』の影響を指摘している点は、本論文における注目すべき成果であり、その論述は説得力を持っている。

しかしながら羅山の老子観を中心とした「儒老合一」の分析と、『田舎莊子』梅岩を中心とした民衆レベルの「儒莊合一」の分析とをつなぐ論理的説明が十分でなく、いわば思想史の地下水脈とでもいべき部分が明確には論述されていない。それは「無心」「造化」「天命」等、主要概念についての論理的追及が十分でないことによると思われる。これと関連して、本論文中で使用している重要な言葉、歴史学の学術用語についての認識に厳密さを欠いている点が見られる。また、用例を豊富にあげ、論述を正確なものにしているが、そのいちいちについての見解の提出が不十分で、用例を生かしきれない等々の諸点については著者の今後の努力に期待するところである。

よって、著者は博士(学術)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。